

2019年度（平成31年度，令和元年度） 幼稚園自己評価

令和2年3月

今年度の重点目標	具体的な取り組み	実施状況	評価の観点	達成度判断基準	判定	来年度に向けて
幼小連携の充実	幼小接続プログラムの作成	<ul style="list-style-type: none"> 今年度も年長児を3つのグループに分け，第1学年3学級とそれぞれ交流を行った 6/17 顔合わせ なかよしランチ 年長児と1年生がペアを組み，簡単な名前ゲーム 6/20 砂遊び（年長児Bグループと1年2組） 砂遊び（年長児Cグループと1年3組） 6/21 砂遊び（年長児Aグループと1年1組） 10/2 年長児と1年生のペアでの遊び なかよしランチ 2/17 新1年生を迎える会に参加 年度初めに計画した活動以外にも，互いの活動予定を連絡し合い，日常的に互いの活動に参加する機会を設けた。その際，教師が幼児児童の姿を把握し，互いのねらいや教師の役割を確認しながら行った 11/14 年長児が作ったお化け屋敷迷路で遊ぶ（事前に呼びかけ，チケット渡しなどを行う） 2/21 6年生を送る会の1年生の練習を見に行く 	年長組2学級と小学校第1学年3学級が学年間で交流活動を計画的に行うことができたか	A：計画以上にできた B：予定通りにできた C：予定の5割程度行うことができた D：できなかった	A	<ul style="list-style-type: none"> 今年度と同様に，年度初めに年間計画を立て，計画的に交流活動を行うと共に，年間計画以外にも日常的な関わりがもてるよう，互いの行事予定や活動予定などを連絡し合う 幼児においては小学校の生活を知り，進学への期待感をもてるようにする 教師においては幼児児童の姿を理解し合い，互いの教育について理解を深める
	幼小接続プログラムを作成，活用に向けて，計画的に小学校の授業を参観する	<ul style="list-style-type: none"> 9/12 南小立野小学校での研究授業に参加した 11/17 附属小学校での教育研究会に参加した 年度当初に計画にはなかったが，附属小学校と「幼小保育授業参観ウィーク」を設け，相互に参観することができた（12/9～13） 	小学校の授業を計画的に参観することができたか	A：計画以上にできた B：予定通りにできた C：予定の5割程度行うことができた D：できなかった	A	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の取り組みを基盤に，引き続き小学校の授業を参観する機会を設けると共に，年度当初に「幼小保育授業参観ウィーク」を計画し，実施する
	幼小の教員が連携して幼小接続プログラムを作成する	<ul style="list-style-type: none"> 幼小接続プログラムを作成し，改訂を行った。改訂の際，小学校第1学年学級担任に実際に活用してもらい，振り返りを行い，互いの意見を反映させることができた 	幼小接続プログラムを作成することができたか	A：作成できた B：8割程度できた C：5割程度できた D：できなかった	A	<ul style="list-style-type: none"> 作成した幼小接続プログラムを小学校第1学年学級担任と連携しながら計画的に検証していく

評価に基づく保育改善	学年会，担任会の充実	学年会，担任会を実施し，ねらいや幼児の育ちを共通理解しながら保育を実施する	<ul style="list-style-type: none"> 日々，学年会を行い，密に話し合う機会をもった。しかし，他学年の様子十分に共通理解されないこともあったため，それぞれの教師が関わった幼児の姿を各担任に伝えるように心掛けた 行事や他学年との活動を行う時には，活動の進め方，教師の役割などを話し合う場を設け，それぞれの学年のねらい，教師の役割について確認した。その際，学級担任ではない非常勤講師と共通理解ができるように，週案・月案を渡すとともに，ねらいに合わせて具体的に役割を確認した 	学年会，担任会を計画的に実施し，ねらいや幼児の育ちを共有することができたか	A：作成できた B：8割程度できた C：5割程度できた D：できなかった	B	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き学年会を充実させるとともに，学年の枠を超えた情報共有の場を計画的に行う
	保育の振り返りの充実	保育記録などからねらいをもとに保育を振り返り，環境の構成や教師の援助の有意性を考える	<ul style="list-style-type: none"> 個人，学年による幼児の姿や保育内容について振り返り，翌日の保育につなげてきた。しかし，園全体で教師の関わり方や環境の構成について，十分に振り返ることができなかった 週案の形態を変え，保育記録を記入するスペースを設け，具体的に自分の保育を振り返り，環境の構成や教師の援助の有意性を考えることができる仕組みをつくり，試行した。しかし，試行期間を十分に確保することができず，全員で活用し，保育の振り返りに活かしたり，内容を共有したりすることができなかった 	保育記録などから保育を振り返り，環境の構成や教師の援助の有意性を考えることができたか	A：できた B：8割程度できた C：5割程度できた D：できなかった	C	<ul style="list-style-type: none"> 今年度作成した週案の形態を利用し，それぞれの教師が自分の保育について振り返り，自分の関わりの有意性を考えることができる仕組みをつくる。また，週案を個人のものだけにするのではなく，全職員が回覧することができる仕組みを構築する
発信の充実	研究成果・研修方法の発信の工夫	自然体験プログラムをまとめ，地域の関係者が活用できるよう，発信の仕方を工夫する	<ul style="list-style-type: none"> 7/31 第68回 全国幼児教育研究大会岐阜大会にて，自然体験プログラムを活用した実践事例を基に幼児の「主体的・対話的で深い学び」を引き出す環境の構成とはどのような環境なのかをまとめ，報告した 昨年度まで蓄積してきた自然体験プログラムを見直したもの，そして自然体験プログラムを体験した幼児とその保護者に行ったアンケート，自然体験プログラムを体験していない幼児の保護者に行ったアンケートをまとめ，報告書を作成し刊行した 	地域の関係者が活用できるような発信ができたか	A：地域の関係者に役立つ発信ができた B：地域の関係者に役立つ発信方法を模索し，試行した C：発信方法について模索している D：取り組んでいない	A	<ul style="list-style-type: none"> 今年度途中から，教育活動として幼児は金沢大学角間の里山ゾーンを利用することができなくなった。そこで，作成した自然体験プログラムを基に，他の活動場所に応じたプログラムに再編し，活用していく 地域や幼児教育関係者に広く発信できるように，全国に報告できる場を模索していく
		安全対策マニュアルを地域の関係者が活用できるよう，発信の仕方を工夫する	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度作成した安全対策マニュアルをもとに，角間の里山ゾーンを利用した自然体験プログラムを実施し，職員，自然インストラクターらと行った活動の振り返りをもとに，見直しを行い，パンフレットを作成し刊行した 	地域の関係者が活用できるような発信ができたか		A	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動として幼児は角間の里山ゾーンの利用ができなくなったことを受け，他の活動場所でも利用できるように再編し，活用していく
	研究成果・研修方法を地域の教育関係者が活用できるよう，発信の仕方を工夫する	<ul style="list-style-type: none"> 研究成果の発信については，研究紀要だけではなく，写真等を多く使用したパンフレットを作成し，刊行した 今年度作成した「接続期プログラム」については，広く活用してもらえるようワード形式で本園のホームページに掲載した 	地域の教育関係者が活用できるような発信ができたか	A：地域の保育関係者に役立つ発信ができた B：地域の保育関係者に役立つ発信方法を模索し，試行した C：発信方法について模索している D：取り組んでいない	B	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き，教育関係者に活用してもらえることができるような，発信の方法について模索していくと共に，そのように活用させているかフィードバックを得ることができる方法についても模索していく 	